

縄文時代における粘土の選択性

Selection of Clay in the Jomon Period

建石徹

①緒言

- ②蛍光X線分析による胎土分析の方法と特徴
- ③在地土器群における土器の型式学的分類と粘土の選択性
- ④土器・土製品等に使用された粘土の選択性
- ⑤結語

【論文要旨】

縄文人は、土器・土製品（土偶・耳飾等）・建築材など、生活のさまざまな場面で粘土や砂を採取、利用した。この際、周辺の自然環境・社会環境・製品の機能・嗜好等を反映して粘土や混和材が選択された可能性が高い。本研究では、土器をはじめとする粘土系資料の材質について、特に粘土（マトリクス）部分に注目した分析を実施し、その選択性について検討を加えた。

縄文土器や土製品等の主成分元素組成を、蛍光X線分析によって検討した。さらに、主成分元素組成をもとに、岩石学のノルム計算を応用して「粘土化率」を算出し、粘土の質（風化の程度）に関する検討を行った。

長野県川原田遺跡における縄文時代中期の事例や、千葉県中峰遺跡における縄文時代中期の事例では、土器型式や器種ごとに粘土の元素組成がまとまることが理解できた。このうちの一部は、遺跡周辺とは異なる地質学的特徴を持つ地域からの搬入土器であるが、多くは遺跡周辺で生産された可能性が高く、遺跡周辺土器（在地土器）であっても土器型式や器種ごとに異なる粘土採取露頭が存在していた可能性が高いことが指摘できた。

また、北海道船泊遺跡における縄文時代後期の事例や、新潟県元屋敷遺跡における縄文時代後二期の事例では、土器と土製品・建築材（床貼材）等の粘土系資料との間に、粘土の母材や質の違いが認められる事例があることが分かった。これにより、縄文人が粘土の利用目的にしたがって粘土を選択して利用していた可能性が高いことが指摘できた。

今後、同様の視点による分析事例を蓄積することで、土器生産をはじめとする縄文人の資源獲得・適応戦略・嗜好性の一端が明らかになると見える。